

景観構造からみた里山景観の変遷と保全策の検討

Transition and Maintenance Strategies of Satoyama Landscapes through Landscape Structure

○栗田英治* 重岡徹* 山本徳司*

KURITA Hideharu* SHIGEOKA Tetsushi* YAMAMOTO Tokuji*

1. はじめに

農村地域の主要な構成要素である水田や畑地、里山などの農用林は、農業を基盤とした地域の営みと生活のなかで、保全・管理がなされてきた。近年の農村地域における過疎化・高齢化等の進行は、農林地の管理水準の低下を招き、農林地が発揮してきた国土の保全、景観や二次的自然の形成といった様々な多面的な機能の低下を招いている。こうした現状を受けて、耕作放棄地や遊休農地の解消を目指す取り組みや、里山林の管理の再開による里山保全活動、農地・水・環境保全向上対策による水利施設等の協働管理活動の支援など、様々な形で農村の地域資源の利用・管理のあり方を見直す取り組みが進められている。今後、資源保全の取り組みを発展させていく上では、個々の要素の利用・管理のあり方を高度に検討していくことに加えて、水田・畑地・用水路・里山林などの様々な要素を含む農村地域全体で、利用・管理のあり方を検討していくことが必要である。本研究では、様々な要素を含む農村地域を里山景観として捉え、里山景観を構成する要素を成立させてきた地域の営み（産業や生活を通じた利用・管理などの主体の関わり）とその変化を明らかにする。結果をもとに、里山景観の変遷を整理し、今後の保全策について検討する。

2. 調査・研究の方法

1) 調査対象地域

調査対象地域には、石川県輪島市市ノ坂地区を選定した。当地区は、輪島市の南部、河原田川の上流域に位置し、地区内に水田、畑地、果樹園、コナラ・クリ等の落葉広葉樹林、スギ・アテ林など、様々な景観構成要素を有する。地区では、1970年頃までコナラ・クリ等の落葉広葉樹を用いた炭焼きが盛んに実施されていた。

2) 調査・研究方法

地区を撮影した2時期（1975年、2008年）の空中写真を用い、土地被覆（植生）判読（景観構成要素の抽出）を行い、2年次の土地被覆区分図を作成した。結果を、GISを用いて解析し、地区の景観変化を明らかにした。同時に、抽出された各景観構成要素が、どのような生業・生活のもとに成立していたのか（各景観構成要素における利用・管理の仕組み）、現在までの各景観構成要素における利用・管理状況の変化とその要因について整理することを目的に、地区住民に対する聞き取り調査にもとづく、里山景観の構成要素の利用・管理の仕組みとその変容の把握を実施した。

* 農研機構 農村工学研究所 National Institute for Rural Engineering

キーワード：資源保全、里山、農村景観

3. 結果

空中写真判読等をもとに、市ノ坂地区の土地被覆（景観構成要素）構成の変化（1975→2008）を検討した結果、構成比の変化では、伐採跡地、柴地といった各林地の施業の段階（成長途上）の林地が減少し、スギ・アテなどの常緑針葉樹林が増加したことが明らかになった。また、要素間の変化では、水田（整備）から水田（耕作放棄）、果樹園（栗園）から落葉広葉樹林（コナラ・クリ等）のように、当該景観構成要素において利用・管理がなされなくなった結果生じた変化と、落葉広葉樹林（コナラ・クリ等）から常緑広葉樹林（スギ・アテ）、伐採跡地から常緑針葉樹林といった伐採、植林などの積極的な景観構成要素への働きかけによって生じた変化の2つの変化が存在していた。図1は、市ノ坂地区の景観構造とその変化を断面模式図で示したものである。1970年以前には、コナラ・クリ林での炭焼き、スギ林・アテ林での木材生産、水田での水稲作などを通じた生業利用、コナラ・クリ林、スギ林・アテ林における薪・キノコ等の採取、前栽畑の自給用の野菜栽培、地区内での法面でのカヤの採取などの生活利用により地区全体に何らかの利用・管理が及んでいたことが分かる。特に、林地は生業利用と生活利用の両方が存在しており、生業・生活

を通じた複合的な利用がなされていたことが分かる。現在、1970年以前と同様の利用がなされている景観構成要素は、基盤整備が実施された水田と畑地（前栽畑）、スギ林・アテ林の一部のみだが、一方で生活面での新たな利用の動きも確認された。

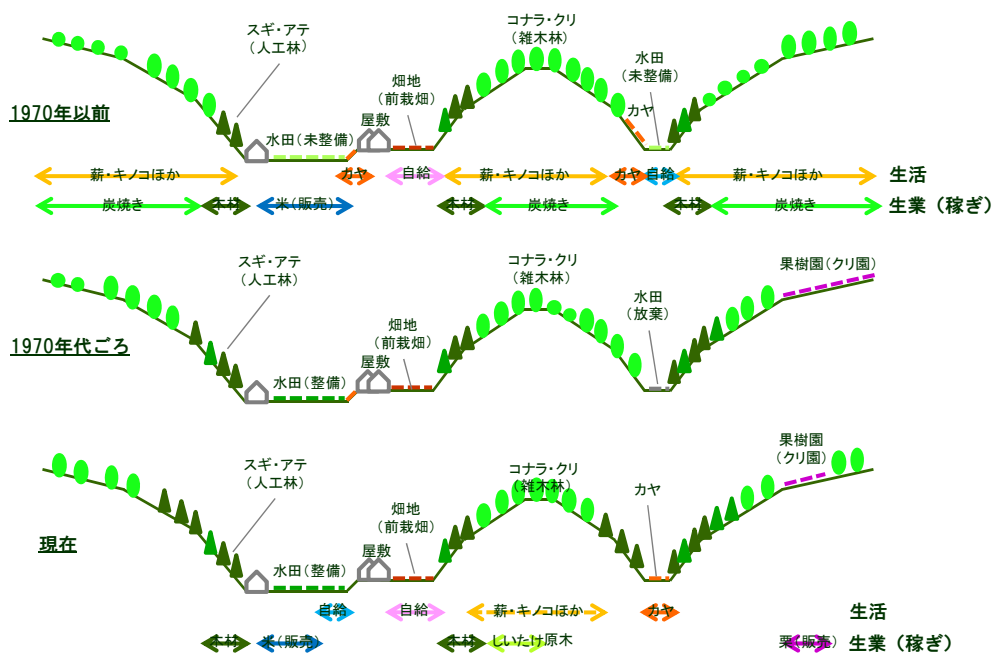


図1 市ノ坂地区における景観構造とその変化

Fig.1 Transition of landscape structure in Ichinosaka area

4. まとめ

農村地域の保全・管理、里山景観の再生を検討していくためには、利用・管理が及ばなくなった要素が地域の中でどのような位置付け（利用・管理の目的、他の要素との関係）にあったのかを整理していくことが不可欠である。例えば、個々の景観構成要素が、生活のもと、生業のもと、生業と生活のもとに成立してきたことを考慮し、生活・生業の両面から保全策を検討していくことが重要である。特に、自給目的等の生活利用は、稼ぎ（販売等）を目的とした生業利用が、経済性や土地所有の意向等に左右されやすいのに対して、比較的实施が容易な例も多く、地区レベルでの取り組みへの発展について検討しやすいと考えられる。